

甲陽軍鑑 品第十五

武士諸道具之事

一或年、志ん介んこう、土屋右衛門の志よう・さいくさぜん右衛門・むとうき
兵衛・そねたくミ、右四人をめして能多まふ様ハ、侍の
も多春る道具尔、なぎな多盤が多く無用仕連と申

付る。そのい者れ盤、信虎の御多い、王可十二歳の時、江志うの

牢人野村源左衛門と云者、清水清二郎と云、年十

八尔なるせ可連尔わ多り合、二尺四五寸の刀を以て、手
もとら春、多々二太刀尔う多る。此野村盤、信虎公侍

二百二十騎の中より七十五人春ぐ里て、在府さ

せ玉ふ近習古れなり。又其中よ里老若ともに、三

十二人恵らひ出春。かの野村も右三十三人の内なり。
(ママ)

其者共、おゝ可多信虎の御代に討死し、又病死も有

之。右三十三人の内、我多いまで者、横田備中・多田淡

路守・原美濃・小幡山城守、是四人のミ残るなり。彼之

野村源左衛門盤、横田備中などゝ同時代まで、原美

濃尔も歳増、猶もつて小幡山城尔は拔群時代さ起

なり。其時、野村四十九歳、功のさ可里尔、王川可の

成敗もの致すとて、大可うのつ王もの能手も那くう多るゝ

ハ、あし支道具のい者連可と、我於さな心尔思徒るハ、

阿まり於しさ能故可なり。其後、能者とも、度々なぎ

な多尔て氣可をするうへハ、とかく我代にかなら須長刀